
田園教会という選択

—ある韓国キリスト教会の生き残り戦略—

秀村 研二*

1990年代に入ると韓国のキリスト教信者の増加は鈍化し、信者数の減少傾向がみられるようになってきた。(2005年韓国統計庁によるとプロテスタントの割合は18.3%、カトリックが10.9%である)これは1960年代後半から始まった経済成長と軌を一にして、産業化・都市化の中で急成長してきたキリスト教(韓国ではキリスト教信者が多いこともあってプロテスタントとカトリックは明確に区分されるのだが、本稿でとりあげるのはプロテスタントキリスト教である)が今までに経験したことのない事態であった。つまり信者数の増加ということを自明のものとして成り立っていたキリスト教または個々の教会が、信者が減少するという現実直面せざるを得なくなっていると言うことを意味する。そのような中で、さまざまな信者獲得のための試みがなされてきており、それは教会の生き残りをかけたものでもある。

本稿で取り扱おうとしているのは、ある教会がおこなった「田園教会」という選択についてである。社会がある脅威や困難に曝された時には、その社会が持っている特性が表出し、そして現実に対処されていく。本稿では韓国のキリスト教会が、これまで前提としてきた信者数の増加という基盤を失った時どのように対処し、または対処しようとするかについて注目するのであるが、それは韓国の社会や文化の特徴をみせてくれるものであろう。

「田園教会」という新しい教会像への転換の試みについてであるが、これは韓国のキリスト教全体からみれば一般的では無く、また将来においても一般的にはなり得ないではあろう。危機に対する対処の一つのあり方と捉えたい。また本稿で取り上げる教会自体が危機に面していたのであり、その中での試みであった。この教会はある教会から分裂して作られた教会であるが、まずこの分裂の事情から述べる。

1. 教会分裂

韓国のキリスト教では分裂自体は珍しいことではない。分裂を繰り返してきた歴史を持つといっても過言ではないし、分裂自体がキリスト教が勢いを伸ばした活力ある原動力ともなっていたのである。A教会はソウル市北方の約25キロ農村地帯に1990年代初頭に作られた新都市イルサンに位置し、イルサンでは一番歴史の古い教会である。新都市建設によってかつての農村教会は都市の教会へと大きく変化した。その変化の中で新しい教会像を模索するKS牧師と、農村教会時代からの慣習から抜け出せなかった長老を中心とする保守的メン

バーの葛藤が起り収拾がつかなくなってしまった¹⁾。結局牧師と長老間の争いは、教団の上位の組織である地域の老会が介入して解決が計られることとなった。それはA教会(長老たち)はKS牧師に退職金という名目で和解金を支払い、KS牧師はA教会を辞任するというものであった。それでKS牧師は信者300人ほどとともに2000年1月1日にB教会を創立し、イルサン新都市内の商業ビルに部屋を借りて独立をした。

一方、A教会では多額の退職金を牧師に支払ったために財政的な困難におちいってしまった。A教会では長期にわたったKS牧師と長老たちとの争いを嫌って信者数の減少が続いていたのだが、さらに300人もの信者がB教会へと出て行ったために、献金による収入が大幅に落ち込んでしまった。A教会は教会堂を建築するにあたり金融機関より資金の融資を得ていたが、その返済にも困るようになり、そう遠くない将来に教会財政の破綻が予想されるようになっていた。信者数が減った状態での献金収入の増収は難しく、また争いによって分裂した教会という評判が周囲に知れ渡っている以上、新たな信者の獲得もまた難しく、打つ手が無い状況であった。KS牧師はA教会が財政破綻に陥れば、A教会を買い取ることににより長老たちを排除し、自分に付いてきた信者たちと共にA教会に戻ることも考えていたようである。

そのような状況の中でA教会に援助を申し出たのが、近くにある信者数400人ほどの教会であるM教会のPS牧師であった。PS牧師の示した条件は、M教会がそれまで教会堂建築のために積み立ててきた資金を提供することでA教会の財政破綻を救う代わりに、M教会と合併をしてPS牧師をA教会の担任牧師とすることであった。教会名称はA教会のままということで、A教会の長老たち幹部は他に財政破綻を回避できる方法もないことから合併に応じ、2000年4月に合併をした(実質的にはM教会によるA教会の吸収合併である)。これによってKS牧師とB教会は、A教会を買い戻すという道が塞がれてしまい、新たに教会が進む道を考えなければならなくなったことになる。

ここで当時の(基本的には現在でも同じであるが)キリスト教や教会をめぐる状況を押さえておこう。1960年代以降、韓国社会の高度経済成長と共に、韓国のプロテスタント教会は信者数を伸ばしてきた。それは産業化による農村から都市への人口移動によって都市に流入してきた若年層、それも特に女性たちを多く信者となったことによるとみられる。また高学化などにより新たに誕生してきた中産層も信者として取り込むことに成功したからであった。1980年代後半にかけて韓国のキリスト教会は信者数を順調に伸ばしてきた。ところが1990年代に入ると、信者数の増加に急ブレーキがかかり、逆に減少傾向も見られるようになった。

そのような時代にA教会やB教会の位置するイルサンは、人口過密なソウル市からの人口分散をめざして新たに新都市として計画・建築され、1992年から入居が始まった。新都市には当初から多くの教会が創られ、新しく入居してくる人々を信者として獲得していったのであった。A教会を例とするならば、新都市建設以前の農村教会時代には80人ほどの信者数であったのが、新都市建設により強制撤去され²⁾、近くの町に一時的に移転していた時には30人ほどの信者になっていた。新都市への入居が始まるとともに、A教会は信者とともに新都市内の商業ビルの2階に部屋を借りて移転した。A教会は新都市内に元々あった教会であったために、新都市に用意された宗教用地を優先的にまた安価に取得できる権利を

持っていた。そのため歴史があり将来性があると考える信者が教会員となり、移転した年の内に300人ほどに信者数を増やすことが出来た。

このように教会は信者数を増やすことが出来たのであるが、問題はそのような信者たちの多くが以前に居住していたところでも教会に通っていた信者たちであり、新しく改宗してキリスト教徒となった人々では無かった点である。新都市では教会が多く作られ信者数も多くなったのであるが、新たな信者の獲得という面では失敗していた。これは新都市だけの問題ではなく、韓国のキリスト教全体が直面していた問題であった。それを顕著に示すことになったのが1997年末におこった経済危機（IMF危機という）であった。経済の構造調整が進む中で、多くの会社が倒産し、また多くの人々が解雇されることとなった。キリスト教会は信者数の減少とそれに伴う献金収入の減少に見舞われ、すでに飽和状態になっていた教会の整理が進んでいくことになる³⁾。B教会がA教会から分裂した2000年はこのように教会運営には厳しい時期であった。新都市に幾つもある教会の中で生き残っていくことをB教会もまた試されていたのである。

2. 新しい出発

KS牧師と行動をとともにしてA教会を出てB教会を作った信者たちは30代から40代の若い年齢層の者が多く、また比較的高い教育を受けていた人々であった。彼らはA教会でKS牧師が試みたさまざまな教会改革や新しい礼拝の方法などを支持し、長老たちの保守的な教会の運営について批判的な信者たちでもあった。それなのでKS牧師がA教会を辞任することになった時に、彼らがA教会を出てKS牧師の新しい教会作りに参画するのは当然であった。新都市という土地柄もあり、彼らの大多数は新都市になってからソウル市などからイルサンに移り住んだ人々であった。彼らはA教会には新都市への移住とともに通い出したのであり、教会自体にさほどの愛着があった訳ではない。どちらかというとならA教会というよりもKS牧師の礼拝スタイルや教会運営に共感を持っていた人々ということができよう⁴⁾。KS牧師は新しい教会をイルサン新都心の中心地域の一つにほど近い商業ビルの3階のワンフロアを借りてB教会を開いたが、名称は「パロ・ク・キョフェ」であった。それはキリスト教が古代ローマ世界に広がっていく新約聖書「使徒言行録」の時代の「まさにその教会」という意味で付けられたという（教会週報の説明）。この名称からも分かるように、KS牧師は教会の将来像をめぐって既存の教会とは異なる何かを追い求めていた。ただしそれが何であるかは具体的にはまだはっきりとしていなかった。

KS牧師がB教会でまず手をつけたのはA教会では実現できなかった礼拝や組織などの改革であった。KS牧師が所属する教団は保守的な大韓イエス教長老会合同教団である。礼拝の際には牧師はガウンを着ることが多いのであるが、KS牧師はB教会設立と同時に礼拝の時もガウンを着用せず背広のまま説教をおこなうようにした。また礼拝中に献金を集めるのではなく、礼拝堂の前に献金箱を置き、礼拝に出席する信者たちが自分で献金箱の中に献金袋（封筒）に入れた献金を入れるようにした。礼拝中の信者の代表祈禱についても長老だけではなく、ある程度の年数を経た信者であれば出来るようにした。これらの改変に対して信者たちは好意的であり歓迎をした。

次に信者の組織を改編した。韓国の教会は信者数を増加させる中で、区域〈クヨク〉という単位によって信者たちを組織化してきた。区域は概ね10世帯くらいの信者たちを地域ごとに組織するものである。それなので住所が近い人々によって構成されることになる。区域の活動としておこなわれるものとして、金曜日の午前中におこなわれる区域礼拝がある。また区域長〈クヨクチャン〉は区域のメンバーの礼拝出席状況や、メンバーたちの動静に注意しており、必要に応じて教会に連絡をして牧師や伝道師などに信者の家庭を訪問する尋訪〈シンパン〉を要請する。このような活動のために区域を構成するのはほとんどが女性たちであり、区域長も女性であることが多い⁵⁾。

KS牧師はこの区域に代わるものとして牧場〈モクチャン〉という組織を提案した。背景としては韓国社会の変化により区域が形骸化していることがあげられよう。1980年代までであれば、区域の集まりには区域に属する世帯の女性たちの多くが集まっていた。ところが1990年代になると女性たちの社会進出が本格化し、多くの主婦たちもまた家計を補う意味もあって働きに出るようになった。そのため区域で集まりをもっても参加するのは半数以下になることが当たり前のようになってしまっている。この傾向は特に若い世代や学歴が高いほど顕著であり、B教会の信者たちにそれは当てはまる。B教会では従来の区域に代えて牧場〈モクチャン〉という親しい者たちが10世帯ほどで構成する、家族単位の組織へと改編した。男性たちや働く女性たちも参加できるように、この牧場〈モクチャン〉の集まりは夕刻や土曜日や日曜日に設定された。

この牧場〈モクチャン〉の設定とともに日曜日の夕刻に設けられている礼拝のやり方もまた改変された。韓国のプロテスタント教会では日曜日の夕刻にも礼拝をおこなうのが一般的である。大体7時位から1時間ほどおこなわれる夕礼拝なのであるが、韓国では称揚礼拝〈チャニョン・イエーベ〉といわれる。午前中の礼拝とは違い、打ち解けた雰囲気の中でおこなわれ、チャニョンと言われる讃美の歌が入ることが多い。また説教も担任牧師だけではなく、教会の副牧師や伝道師、また他の教会の牧師などと呼んでおこなわれる。かつてはこの称揚礼拝に多くの出席者（大体昼間の礼拝の三分の一から半数程度）があったのだが、近年若い世代では日曜日の午後を夕食などのために家族で過ごすことを好む傾向にあり、出席者が減ってきている。そのため夕礼拝をせずに、昼食を挟んで午後の早い時間にこの称揚礼拝をおこなう教会も多くなっている。

前にも述べたようにB教会には若い世代の信者が多いので、彼らの生活スタイルと教会をどう結びつけるのかは難しい課題でもあった。KS牧師自身が当時40代後半だったと言うこともあり若い世代の欲求に対して理解があった。B教会では信者の活動を区域ではなく牧場〈モクチャン〉を中心にすることに変えたことは述べたが、称揚礼拝も牧場〈モクチャン〉を単位にすることにされた。教会に日曜の夕刻に集まって称揚礼拝をするのは月一度だけにして、他の週は牧場〈モクチャン〉ごとに集まり、礼拝をして過ごすことにしたのである。牧場〈モクチャン〉は親しい人々によって構成されているのであるから、当番制で各家庭に集まり礼拝をやってから食事をして親睦を深めるのは可能だと判断され、リーダー役である牧場長（男性）の教育をおこなってから実行に移された。各家庭を廻るだけではなく日曜日の午後に、牧場〈モクチャン〉ごとに近郊に出かけて、家族ぐるみのハイキングやバーベキューパーティーなどもおこなわれたりもして、信者たちには好意的に受け止められてい

った。このような教会の運営をめぐる新しい方法の模索を続ける中で、KS 牧師と教会の中心メンバーたち（長老や按手執事）の中では教会の将来像がだんだん固まっていたようである。先にも述べたように A 教会が M 教会と合併したことにより、A 教会の財政破綻を待って買い取るという戦略をとることは出来なくなっていた。とはいえ、イルサン新都市内で新しい教会堂のための用地を求めて教会を建築するのは、当時の 300 人ほどの信者数では資金的にも難しかった。KS 牧師は A 教会での紛争の原因の一つとして、信者数が多くなってしまいコミュニケーションが図れなくなったことがあったと見なしていたので、教会の信者数はあまり多くなくて皆の顔が分かる程度の教会にしたいと思っており、献金の額を確保するために信者数を増やすという選択は避けたかった。新都市内に教会堂の建築が難しいとなると選択肢は新都市の外となるが、郊外に教会堂を建築することが教会経営という観点から可能なかどうかというのが問題であった。またもう一つの問題として、新都市内の繁華街の商業ビルに部屋を借りていたので月々の支払いが小さくなかったという点があった。毎月の支払いを考えるのであれば、早い時期に郊外に土地を求めた方が良いであろうというのが最終的に牧師と教会の中心メンバーたちの得た結論だった。信者たちは教会が分裂するに際して KS 牧師と行動をともにしたのであるから大きな反対は無いだろうと予想され、実際そうだった。さっそく土地探しが始まり、2000 年の 6 月には新都市の中心から西北へ 12 キロほどの漢江沿いにある尋鶴山〈シマックサン〉の麓に広がる土地 2000 坪を得ることが出来た。この間の決断は早かったと言える。

B 教会が求めた土地のあるイルサン新都市の北側は、当時まだ開発されておらず田園風景が広がるだけで、道路などの整備もなされていなかった。ただ将来北部の坡州〈パジュ〉郡の交河〈キョハ〉地区に新しく新都市の建設がなされる計画があり、開発が進むであろうという見込みのある場所であった。

従来の韓国の都市の教会は、都市の中であって周辺の住民が通う洞内〈トンネ〉教会⁶⁾か、広い地域から信者を集める巨大教会が大多数であり、どちらにせよ都市の中にあるのが一般的である。郊外にあるのは、祈禱院などキリスト教の付属的な施設であった。そういう中であえて郊外に土地を求めたとなると、従来とは違う戦略でもって教会の位置づけをしなければならなくなってくる。既存の信者たちは KS 牧師に賛同しているから良いとしても、教会が郊外に出るとなると、周辺に住民は居ないのであるから新しい信者の獲得は難しいことが予想される。つまり信者が増えて教会が大きくなることを目的としていた教会の発展モデル⁷⁾の変更が求められる。前述したように KS 牧師は、信者数が増えすぎて、教会内のコミュニケーションが図れなくなることを危惧していたので、信者数の数的な増加を教会の最終的な目的としないことには問題なかった⁸⁾。

またもう一つの問題として取得した土地自体の問題があった。取得した用地の種目は農業用地であり、そのままでは建築することが出来ず、種目の変更が必要であった。また北朝鮮との軍事境界線に近いこの辺りでは建築物の制限があり、その許可は行政ではなく軍から得なければならない。土地をめぐる許認可の事務手続きは煩雑であるので教会自体としてはおこなわず、コンサルティング会社に依頼をすることにしたが、建築許可を得るまでには時間がかかることが予想された。このような過程の中で、KS 牧師には教会の将来像として「田園教会」というものが形成されていったようである⁹⁾。それは忙しい都市の人間が、自然に

恵まれた田園の中で日曜日に家族と共に教会で神と対話をし、信者同士の交流を持てるような場として設定したいというものであった。実際の教会堂の建築までは時間があるので、教会は信者たちに用地の利用を呼びかけ、夏休みに信者の家族たちがキャンプをしたり、牧場〈モクチャン〉での集まりに積極的に利用したりしていたことがKS牧師に「田園教会」構想の可能性を確信させるものとなった。土地の種目変更と軍からの許可を得て、2002年9月1日に教会用地で起工のための礼拝がおこなわれ工事が始まった¹⁰⁾。

3. 田園教会としての始まり

B教会が建築した教会堂は地下一階、地上二階建てで、300人の信者を全部収容するには少し小さい規模であった。2000坪の敷地があるのであるからもう少し大きな礼拝堂を建築するのも可能であったが、教会堂をあまり大きくせずに空間に余裕をもたせ、信者たちが自然に親しんだりスポーツに汗を流すことが出来ることをめざした。また信者たちの多くがイルサン新都市から教会には自家用車で来るのであるから駐車場のスペースも必要であった。KS牧師によると3000坪の敷地があれば、もう少し余裕のある全体の配置が出来たであろうということであった。韓国のキリスト教では次の世代の信者を育てる教会学校を重視しているので、そのための施設（教育館）や食堂なども必要とされるのだが、行政からの許可や資金の面から将来の課題とされて先送りされた¹¹⁾。設計は大学の建築学科教授で多くの教会堂の設計を手がけた人物に、シンプルで現代的な感覚という点を重視するよう希望して依頼された。

教会堂（建坪250坪）の完成によって、B教会は2003年11月初めに移転をした。それにもなって教会名称の変更がなされた。それは「イエスロ教会」というもので、韓国語では「イエスに」とか「イエスの方に」、もしくは「イエスで」と言うような意味を持つ¹²⁾。この名称は特に田園教会というようなイメージを前面に出したものでなく、また地域の名称を付けたものでもない。KS牧師によると、教会の近くに漢江沿いに伸びる自由路（北朝鮮との直接の往来のために設けられた高速道路）があるので、これをイメージしながらイエスの道に従う信者たちの教会という意味で付けたということであった。教会堂が移転した後も、教会堂周辺に信者たちが使える畑（週末農場）や井戸、庭、それに背後の山に登るための道などの整備が信者たちの協力を得ながらなされた。

新しい教会堂に信者たちは満足していた。教会堂自体は現代的な感覚で作られているので都市の中に位置する新しい教会と変わらない。また周辺には他の教会には見られない自然環境があるために、日曜日には家族で礼拝に参加をし、その後に昼食をとり午後は登山、散策、畑の手入れ、スポーツなど思い思いに長い時間を過ごす姿が見られる。交通の便は良いとはいえないが、新都市の都心部から12キロという距離は決して遠いものではない。逆に、前述の自由路という高速道路から近いために、ソウル市の南の郊外に建設された新都市に引越した信者が、日曜日には高速道路経由でやってきて（1時間ほどしかかからない）礼拝に参加して一日をゆっくりと過ごすということも見られる。イエスロ教会の信者たちは高学歴者が多いのであるが、その中に夫が音楽大学の教授（声楽）と妻がドイツで勉強をしたパイプオルガン奏者という夫婦がいる。彼らの意見を聞きながら教会は礼拝堂にパイプオルガン

を設置することにした。信者数 300 人の教会でパイプオルガンというのは大きな負担であったが、礼拝をより恩恵あるものにするために決定されたという。ドイツでマイスターをとった韓国人の技術者の手によって約一年かけて組み上げられ 2005 年 12 月に完成した。規模は小さいが、電氣的に増幅されてない自然の音は信者たちを満足させ、教会の雰囲気を作り上げている。

パイプオルガンの設置は礼拝のやり方や雰囲気にも影響を与えたようである。それまでは礼拝の前に、バンドの伴奏でゴスペルソングが歌われ雰囲気を盛り上げていたのであるが、パイプオルガン設置後は、ゴスペルソングは礼拝の最後に歌われるようになった。礼拝前はパイプオルガンが奏楽をおこない、静かに礼拝を迎えるようになった。これは教会学校は別として、信者の中に 20 代などの若者が少ないことも影響しているかも知れない。パイプオルガンを実際に聞ける場所はさほど多くないので、信者でない人々が教会に訪れるようになったり、信者以外にも開かれた演奏会などがおこなわれたりしている¹³⁾。

前述のように信者たちの多くは日曜日に長い時間を教会や教会の周辺で過ごす。そのために信者たちの交流の場所としてカフェ（喫茶室）が設けられた。カフェとはいってもコーヒーの自動販売機が設置され、椅子とテーブルが置いてある空間だけなのだが信者たちには好評である。食事の後や周辺の散策などの後で思い思い集まっては話しをしている姿を見かけることができるが、もう一つの効果ももたらした。教会の背後には尋鶴山〈シマックサン〉という、漢江沿いにあり北朝鮮も間近に眺望することの出来る山（標高 200 メートル余り）があり、人気が高く登山客も多いことは前述した。教会の敷地から直接登山道に道を付けたことにより、登山客が教会に降りてきたり、教会の駐車場に車を止めて登山をすることが増えてきた。このような教会の信者以外の人にもカフェを開放したため、多くの人々が登山の前後に教会を訪れるようになった。そのような人々の中から「田園教会」としてのあり方に賛同して、教会の所属を変えて教会員として登録する人々が出てきたのは、当初予想されてはいなかった。

一方、「田園教会」となったことで、韓国の一般的な教会においておこなわれていることで出来なくなったことがある。それが各種の祈禱会である。韓国のキリスト教会を特徴付けるものの一つとして、毎朝 5 時からの早朝祈禱会〈セビョク・キドフェ〉や金曜日の夜におこなわれる徹夜祈禱会などの祈禱会があげられる（早朝祈禱会や徹夜祈禱会の特徴については【秀村 1995】を参照のこと）。街の中の近い距離にある教会（トンネ教会）であると、通うのにさほど時間はかからないので、熱心な信者だと毎朝の祈禱会にも、また夜遅くまでおこなわれる祈禱会（徹夜祈禱会）にも出席は可能である。ただイエスロ教会のように街の中から離れていると物理的に不可能であるので、このような祈禱会を教会の通常の日課としてはおこなわないことにした¹⁴⁾。このような祈禱会が韓国のキリスト教会を特徴付けてきただけに特異ではある¹⁵⁾。

「田園教会」としての教会のあり方に信者たちもおおむね満足している。教会が信者に対しておこなったアンケート（2006 年 11 月実施）の結果によってもそれは伺える。交通の便が悪いことや社会奉仕の場が少ない事などへの批判はあるが、信者たちは前向きに解決方法を探そうとしているようである。教会が積極的に新しい信者を迎えるためのプログラムを用意しなかったにもかかわらず、信者数は少しずつでは増加を続けている。

4. おわりに

信者数の伸びの鈍化と共に韓国のキリスト教会は従来の成長路線からの転換を余儀なくされている。各個別の教会は新しい信者獲得のために様々なプログラムを展開しているが、キリスト教に新たに入信する信者が少ない以上、限られたパイをめぐる教会間の信者獲得競争とならざるを得ない。実際、信者数の少ない開拓教会〈ケチョク・キョフエ〉は存続が難しくなっている。一方、毎年多くの牧師が神学校から輩出されるために牧師の就職難も起きている。開拓教会設立が簡単に出来なくなった現在では、牧師たちは国内での伝道から海外での伝道へと目標を変えて行っている。韓国は宣教師の数が米国に次いで2番目に多い国であるが、その要因の一つとして牧師の就職問題が考えられるのである〔秀村1999〕。

キリスト教をめぐるそのような厳しい状況の中で、B教会＝イエスロ教会は田園教会として展開することを選んだ。イルサン新都市内の教会の飽和状態、新しく教会堂を新都市内に建設することのリスクの高さなどはあったにせよ、自然条件に比較的恵まれた道路事情も良い新都市という立地を生かして「田園教会」という生き方を選び、そして成功してきたことには幾つかの条件があったことを再確認しておきたい。一つには何よりもKS牧師が「田園」教会という教会のあり方を信者たちに示すことが出来た点。B教会の信者たちがKS牧師と共にA教会から分立し、また時間もたっていないことによって牧師の示した目標を容易に受け入れることが出来た点である。歴史のある既存の教会では、このような教会のあり方を変える大胆な方向転換は容易ではないと考えられる。そのような意味では、イエスロ教会の事例を韓国キリスト教会の危機への対処の仕方として一般化して考えることは出来ない。

しかしイエスロ教会の事例からいくつかの韓国のキリスト教会が進んでいく方向性を見いだすことは可能であろう。まず信者数の増加という量的な成長だけが教会の目標となくなっただ点は重要であろう。イエスロ教会は大きくないという選択をし、信者間の親密さに教会の生きる道を探した。「田園教会」といった教会の方向性を明確に提示し、信者の満足度を高めるための努力がなされるようになっている点もある。他の教会にないサービスの充実が求められてきているのであろう。また一般的なキリスト教会ではどこでもおこなわれてきた（またおこなわれている）日曜日の夕方の礼拝（チャニャン・イエーペー）や早朝祈禱会、金曜祈禱会がそのままの形式ではおこなわれなくなっていることにも注意しなければならない。牧場（モクチャン）という新しい親密さによる家族を含めた信者組織を作り、伝統的教会の区域という地域による信者組織に代えていることにも注意を払いたい。元来流動性に富み、地域的な繋がりが希薄な韓国社会においては、親密さによる人間関係の構築は重要である¹⁶⁾。

イエスロ教会の事例からは、韓国のキリスト教会は、誰でも信者として受け入れ量的な大きさを旨とするのではなく、教会も自身のあり方を明示しそれに賛同する信者たちによって支持されるあり方への変化が伺える。信者も教会を選ぶが、教会もまた信者を選んでいるのだ。

註

1) このA教会内の葛藤については〔秀村2002〕及び〔秀村2003〕を参照。

- 2) 新都市開発以前から所在していた教会(8教会)については優先的にまた市価よりも安い価格で宗教用地が与えられる事になっていた。しかしA教会の当時の牧師は、立ち退きの補償金を不満として交渉に応じず、結局A教会は強制撤去された。このことによりA教会は教会敷地の獲得が遅れてしまった。
- 3) 教会の減少については[秀村2002]を参照のこと。
- 4) 逆に言うならばA教会に残った人々は、長老たちに近い保守的な人々を除いては、教会への関与に関しては無関心な人々が大多数であったと言うこともできよう。彼らの多くはA教会がB教会に合併した後に、PS牧師と共にB教会から来た信者たちとの間に親密な関係を築くこともなく、多くが他の教会に移動するなりして教会を去っていくことになる。
- 5) 区域については「秀村1995」を参照。
- 6) 一部の巨大教会を除いて、教会は自宅から歩いて通うことの出来る洞内(トンネ=町内の意味)の教会に通うのが一般的であった。ただ現在では、特に若い世代では自分の好みにあった教会に時間をかけて通うことも増加してきている。
- 7) これを教会の成長という。信者が増えることは神からの恵みだととらえる見方が存在する。そのため韓国の教会は信者数の増加と大きな教会堂建築に力を注いできた。
- 8) 教会の方針を定める場合に牧師と信者間の意思疎通が問題になるが、B教会の場合は牧師の分立に伴い行動を共にした信者たちであり、また教会建築の資金も牧師が退職金から多くを負担するのであり信者に大きな負担がかからないこともあり牧師の力が大きく影響したと言えよう。
- 9) 韓国の教会の中には「田園教会」という概念が生まれてきており、次のように分類されている。①都市から郊外に移転して周辺の自然環境と親しむことを中心とする教会、②農村に存在する教会が意図的に自然環境を中心として都市の信者を呼び込む場合、③田園教会という概念はないが美しい自然の中にある古い教会が都市教会の修養会などで使われる場合などである[김석진 2007]。
- 10) 工事が始まるとすぐに周辺の住民からのクレームによって半年間工事がストップした。これは道路から建設用地への進入道路の使用をめぐる、入り口の住民が使用取り消しの訴訟を起こしたからであった。訴訟を起こした住民は牧師であり、数年前に引っ越してきて自宅を教会として数人の信者を集めて礼拝をしていた。最終的にはこの住民=牧師の子女に対してB教会が奨学金を出すことで解決した。
- 11) そのため教会堂の地下一階を教会学校で使用し、食堂は別途簡易的な施設で間に合わせることにした。牧師たちの部屋や事務室も地下一階に用意されていたが、教会学校の子供たちが増えたので部屋を明け渡して敷地内に作られたプレハブに移った。2009年秋からは礼拝堂の増築と教育館として食堂・事務室なども入る建物の工事が始まっている。
- 12) 教会の名称についてKS牧師はA教会にいたときからある意見を持っていた。それは教会がめざす方向を示すものでありたいというもので、従来の教会が位置する地名を付けた名称には不満足であった。実際、KS牧師はA教会の名称を「市民教会」に変更しようとして長老たちと意見の対立を起こしたことがあった。[秀村2002]このような教会名称の傾向は1990年代後半から韓国のキリスト教会に多く見られるようになっている。数多い教会の中で如何に自己主張をするかという問題でもある。
- 13) 韓国キリスト教会の一般的傾向としては、礼拝においてゴスペルソングを用いることが増えてきている。テンポが良く気持ちを高揚させる効果のためと言われる。KS牧師もかつてはA教会で礼拝中にゴスペルを用いて長老たちと対立した経験を持っている。パイプオルガンの設置によって伝統的な讃美歌の使用に回帰すると共に、他の教会との差別化を図ったともいえる。
- 14) 土曜日だけは早朝祈禱会を行い、日常的に祈禱会に参加できない男性たちへの参加を呼びかけている。祈禱会の後に朝食を皆で取り運動などを共にこなう人々も少なくない。
- 15) 早朝祈禱会に参加して一日を始めたいという信者もいるので、その場合には自分が住んでいる場所の近くの教会の早朝祈禱会に参加することになる。これはさほど珍しいことではなく、所属教会が遠い場合にはよくおこなわれている。このような面では韓国のキリスト教会は柔軟性をもっている。
- 16) 父系親族関係だけではなく、さまざまな人々を横断的に結びつける社会関係の重要性が今までも指摘されてきた。例えば[伊藤1997:131]。

参考文献

- 김석진 2007 『전원교회 설립과 운영의 실제 연구-예수로교회를 중심으로』(총신대학교 목회대학원석사논문)
- 秀村研二 1995 「韓国キリスト教の現在とその理解」東京都立大学社会人類学会編『社会人類学年報』21号、79-100頁、東京：弘文堂。

- 1999 「受容するキリスト教から宣教するキリスト教へー韓国キリスト教の展開をめぐって」『朝鮮文化研究』第六輯、95-107 頁、東京大学大学院人文社会科学系研究科・文学部朝鮮文化研究室研究。
- 2002 「牧師と長老をめぐる葛藤ー韓国 A 教会の紛争」伊藤亞人・韓敬九編『韓日社会組織の比較』、227-242 頁、東京：慶應義塾大学出版会。
- 2003 「フィールドとしてのキリスト教・教会」韓国朝鮮文化研究会編『韓国朝鮮の文化と社会』2号、29-45 頁、東京：風響社。
- 伊藤亞人 1997 「人間関係」伊藤亞人編『もっと知りたい韓国第二版』2、東京：弘文堂。